研究紀要第13号
２０２４年３月

【寄　稿】

# イタリアの国民形成と歴史記述：批判的調査

マルコ・メリッジ
訳：倉科岳志

イタリアの国民国家建設の形式やその統一過程で活躍した人物たちの価値観については、非常に多くの文献が存在する。

史家たちは国家統一直後からそうした文献を生産し始め、その数は現在にいたるまで増え続け、その内容はほとんど常に相反する解釈になっている(1)。

ひるがえって、統一前の時点ですでにイタリアのナショナリズムにはさまざまなものがあり、やはりそれらの間には激しい対立が見られた。

自由派、民主派、社会主義者、君主論者、共和派、連邦主義者、カトリック教徒、正統主義者、保守主義者、反動主義者―。これらの呼称はいわゆるリソルジメントの歴史、すなわちイタリア国家の政治的統一過程を叙述するさいに通常使用される語彙であるが、そのうちのごく一部にすぎない。これらは、統一前の数十年間その実現に貢献した、あるいは逆にそれを阻止しようとした人々の立場が多様であり、しばしば絶対に両立しないことを物語っている。

リソルジメント期の主な政治家の中には、統一イタリアが中央集権体制をとることを望む者もいれば、反対にこれを連邦国家としてイメージする者もいた。また、自由と独立は求めるが、既存の諸国家をなくすことになるので統一を望まない者もいた。最後に、自由も統一もまったく望まない者もいた。

要求は数多くあり多岐にわたったが、結局解決策は一つしかなかった。それ

ゆえ、統一後ただちに不満分子が列をなしてたいへんな混乱を招いたとしてもけっして驚くにはあたらない。

公定のイタリアの隣に並んで、すなわち支配者の地位にあった王家および政府の隣に並んで、数多くの「不満なイタリアたち」[(2)]がまもなく人々の目に留まるようになり、いっそうの活力を持ち始めた。共和主義、カトリック、反動、地方主義、正統主義、民主主義、原初的な社会主義、そしてまもなく無政府主義までが現れた。むろん、このリストはまだ続けられた。

このような対立に歴史学も影響を受け、そのおかげでイタリアにおいて国民国家形成に関する文献の生産が進んだわけだが、これらの文献によってしばしば強調されるようになるのはその問題点である。

当然ながら、とくに統一後の数十年の間にはいわゆる公式の解釈があった。国家統一を賭けた戦いの勝者の視点を暖かく支持する歴史解釈である。

しかし、多くの史家の目には国家は不完全なもの、あるいはせいぜいのところ、いっそうの発展を要する事業と映った。ゆえに、ときに統一事業はいまだに終結していないと考えられてきた。というのも、例えば、当時確立された自由主義的な政治体制には社会的な狭隘さやエリート主義的な特徴が見られたし、あるいは中央と地方の対立もすぐに顕在化し始めたからである。すなわち、国家が国民全体を統合し、広い層から代表を選出することができなかったので、一般に統一は何か不十分なものと考えられてきた[(3)]。これこそが国家統一の史学史全体を横断してきた見方である。そしてこれは近年においてもいまだに存続し、統一150周年を機にした公式の歴史叙述においても、メディアやウェブサイトを通じた大衆化された歴史叙述においても、数多くの声によって復活させられた見方なのである。

ここでは、イタリア統一を巡る批判的な論議の中で、今日まで提起され続けてきたいくつかの点を分析してみたい。

第一は、リソルジメントのエリート主義的性格（大衆なきリソルジメント）

とその結果、すなわち、達成時点で形成された国民国家の正当性と包摂の度合いがわずかであったというテーマである。これは長らく、先に述べたいわゆるリソルジメントの「価値切り下げ」言説の中核を担ってきた。しかし最近になって、新たな論証によりこのテーマに対して異議が申し立てられている。

この異議は、とりわけアルベルト・マリオ・バンティの『リソルジメントの民族』という著作によって唱えられた[(4)]。この書の中でバンティは祖国愛という現象に注目し[(5)]、理想のためという、いわば合理的ではなく感情的理由から、自己を抑え犠牲に供し危険に満ちた人生に立ち向かおうとするあの意思を強調した。そして、これは二世代にわたるイタリア人の少なくとも一部によって1820年代と1830年代、しかしとりわけ1848年の諸革命とその後の10年間に強烈に示されたと論じている[(6)]。

数年後、バンティとポール・ギンズボルクは民族のために兵として志願する人々の世界を過小評価しないよう再度呼びかけた。この志願兵の世界にイタリアの旧国家の住民数万人が直接関わったというのである。二人の史家は、その数十年の闘争に従事した第一線の人々だけでなく、男女からなる支持者たちのネットワークもまたリソルジメント運動の重要な部分であったと指摘した。「武器を手に戦いリソルジメントに参加した人々の近くには、しばしば何十万人もの人々がいて、心からの共感もしくは用心深いおののきをもってその運動を見守っていた」[(7)]。そのさい、明らかに社会史が重要な役割を果たしていた。すなわち、史家たちは1980年代と90年代に現れた諸々の方法（それらはとくに人間関係のネットワークを検討することに注意を払っていた）により、それ以前はほとんど政治史の視点からしか観察しなかった現象を歴史として記述するときの、その見方を作り変えたのである。リソルジメントで戦った人々の「数」は当然ながら比較的少ないままであったが、かれらを文脈の中で考える新手法のおかげで、かれらが質的により大きな意味を持つということが理解できるようになった。

しかし、この数字は正確には何を語っているのか。そしてこの数字はリソルジメントだけでなく、いわゆる反リソルジメント[8]、つまりイタリア統一の過程に反対しようとした運動について、何を語っているのだろう。

まず、1848年から1860年の期間を考えてみよう。この時期、何万人ものイタリア人が武器を手にリソルジメント運動に参加した。それは大衆運動だったのか。例えば、ガリバルディの指揮下で戦った赤シャツ隊はブルボン王国の臣民に自由をもたらすことを目的にしていながら、そこには南部の人々がまったくと言ってよいほどにいなかった事実を考慮すれば、たしかに均質な形での運動ではなかった。それでも、リソルジメント闘争への兵士としての参加割合がとくに高い場合もいくつかあった。例えば、当時人口3万人で、1860年5月から9月にかけてガリバルディ率いるパトリオットの軍に1000人近い志願者を出したクレモナの例を考えてみよう。前線にいた若い兵士たちだけでなく、家に残っていた支持者たちも考えれば、この街のほぼ全体が民族という大義に共鳴していたのである[9]。

当面イタリアにとどまって、より長い時間的枠組みを検討しよう。まず、19世紀前半、そして国家統一後の10年間に再び重要な役割を果たした反動や反民族運動への参加者数に注目しよう。祖国愛の戦線に連なる兵士たちはブルジョワを中心としていたが、これと異なり反動や反民族運動の戦線は民衆、とくに農民で構成されていたのが大きな特徴であった。そればかりか、かれらの「人数」は数千人ともなり、おそらくブリガンタッジョ（南部イタリアにおける匪賊の反乱）にさいしては1万人にも上った。そして、この現象は、1860年から1870年にかけて南イタリアの一部の人々が国家統一の方法に感じていた不満を、明瞭に可視化したものであった[10]。

祖国愛に導かれた運動がある一方で、反民族的な立場の自発的で積極的な政治運動があった。こちらについては、おそらく統一後の「大ブリガンタッジョ」の事例について述べるのが適切だと思う。この反民族運動はより正確には反体

制運動であり、南部史に深く根ざし広範に蔓延していた違法行為の延長線上にあった。いずれの大義のためにせよ、19 世紀中頃の数十年間、武器を手にして戦う準備のあった人々の数は相対的にはつねに少なく見える。私たちはこの数字を、現在の時点である政治現象の集団規模を語る上で意味があると考えられる水準と比較し少ないと判断する。ただそのさい、この少ないという感覚はどの程度偏っているのかと疑わしく思われることだろう。なにしろ、私たちは 20 世紀における大衆的規模とは何かということを多かれ少なかれ自覚的に前世紀に投影してしまっているのだから。

しばしば行われてきたように、この目的のためにリソルジメントで利用される試金石はフランス革命だ、と反論されよう。加えて、リソルジメントは強力な民衆の参加を欠いていたためフランス革命の失敗例であると多くの人々によって主張されてきた。しかし現実には、リソルジメントへの参加「人数」はフランス革命への参加「人数」からそれほど離れてはいない。実際のところ、フランスの場合も動員数は（2000 万人以上の人口に対して）せいぜい 15 万人程度である[11]。

19 世紀ヨーロッパの別の状況、スペインの政治的混乱を考えてみよう。この場合でさえ、当時の政治的対立への積極的関与は数万人以上の規模にはならないことが分かる[12]。

要するに、18 世紀後半から 19 世紀にかけてのヨーロッパの人々の数、つまり、政治的出来事を作り出すのに関与した人々の数が問題となる。まず、ここでいう関与とは個人の自発的で積極的な関与である、ともっともな定義をすることができる。そのうえで、これへの参加者数をどう考慮しても結果としてその規模はほとんど数千人、あるいはもっとまれではあるが数万人の水準から逸脱することはないのである。

そして、この政治的出来事が毎回発生するのは数千万人の住民を有する国の人口との関係においてである。ゆえに、「大衆」の人数は 20 世紀の政治に限っ

た特徴であると結論づけねばならないのではなかろうか。

ときには19世紀においても、たしかにそうした様相を呈する場合も実際にはある。ただ、この場合はいわば現実をどうにかしようとしてというよりも、さい先を期待した結果そうなるのである。例えば、ガリバルディはヴェーネトとローマを獲得して国家統一を完成させるために、1860年代初頭、パトリオットたちに100万丁の小銃を配布しようとしたが、その意図を考えてみるのがよいだろう。

あるいは別のときには即興的に特別な人数になったこともあった。例えば、1864年、ロンドンのトラファルガー広場にはガリバルディに賛辞を送るべく、50万人が数時間にわたって集まった[13]。

つまり、これは大衆社会以前の「大衆」のヨーロッパである。ただ、他の場所で同じようなことが起こればこの時点ですでに異なる事態になっていたかもしれない。

しかし、その場合には検討すべき大陸を変えなければならない。そして、1830年代にアレクシス・ド・トクヴィルがアメリカに渡り、その世界では民主主義がすでに現実となっていたと知るまでの道のりを辿らなければならない[14]。

さて、周知のことだが、1860年の夏から秋にかけてガリバルディの指揮下、数万人の志願兵はイタリア統一に血をもって貢献すべく半島南部に進軍した。そんなかれらはおよそ人口2000万人の代表であった。同年、アメリカにはほぼ同数、すなわち約2200万人が住んでいた。しかし、こちらの場合、その直後に南部諸州との戦争が勃発し数年続くことになる。そのさい、議会はいかなる形であれ徴兵制を課す権限を持たなかったにもかかわらず、志願者はほぼ200万人に達した。

アメリカの場合、戦争が始まる前の段階ではだれも動員規模を予想できなかった。それにもかかわらず成功を収めた理由は、その呼びかけが「民主的制

度を必死に守ろうとし、政治に強く関心を抱くようになった人々」に向けられたからだった[15]。しかも、その人々は当時のイタリア人、スペイン人、そしてフランス人とは異なり、ほぼ完全に読み書きができたのである。

それゆえ、民主主義と識字能力と政治的覚醒はイタリア・リソルジメントの経験ではまだほとんど達成されていない目標であったが、反対に、60年代初頭のアメリカの南北戦争ではすでに確かな現実になっていた。そしてさらに、一方でイタリアの志願兵たちは1859年以前に権力の地位にあったイタリアの諸政府から公然たる敵意にさらされていた。というのも、かれらは国家統一のためだけでなく、そうした政府の代表するものと戦おうとしており、それゆえにかれらは基本的には違法な存在とみなされていたからである。他方で、アメリカの志願兵は北部政府から公に激励され、同時に呼びかけに応じる準備のない人々には世間からそれとなく批難が浴びせられていた。

当然ながら、これら二つの事例は慎重に比較されなければならない。それでも両者を比較することで私たちはある尺度を手にできる。これにより、当時の大衆規模がおおよそどのような意味を持ったのかを考えられるようになる。すなわち、イタリアでは識字率が低く民主主義も定着していなかったために、当然の帰結として政治的関心が強く喚起されるということもなかった。反対に、アメリカでは市民は活字に親しみ、その自然な前提に高い識字率があった。これらの要素がうまく機能し、結果、政治的関心が急速に高められていた。

さて、このような点で19世紀中頃のヨーロッパ全体はアメリカ合衆国に比べ著しく遅れていたのだが、そのヨーロッパの文脈の中でもイタリアはとくに遅れていた。同国の「民衆」は文字情報にほとんど親しんでいなかったのである。

1850年代のイギリスやドイツのような国々では、最も売れている新聞ならば一日に20万部近くも刷ることができた。同時期のイタリアで発行部数の最も高い定期刊行物はイエズス会による反自由主義的で保守系の雑誌『カトリッ

ク文明』だが、その一日の発行部数はわずか1万3千部であった。祖国愛に賛同する出版物はずっと低い部数だった[16]。

これらは間違いなく低い数字である。統一当時、方言ではなくイタリア語を日常的に話していた人数は推計にもよるが、2.5%から10%であり、散発的にでも何らかの形で読書に触れていた人は、せいぜい人口の20%程度であった[17]。同じ年、イギリスでは人口の60%は読み書きができ、ドイツではさらに高い割合を占めていた。

ゆえに、低い数字なのである。ただしこの点については自問せねばならない。すなわち、愛国的なエリートたちは、これまで述べてきた少数の人々が多くなっていくことを本当に望んでいたのか、と。かれらエリートたちは大衆の一部を自分たちが築こうとしていた国民国家の共同所有者として、修辞を用いて呼び寄せはしたが、そもそもあらゆる社会条件下にある不分明なイタリア大衆の地平へ降りていこうとしていたのであろうか。

19世紀前半におけるイタリア文化の主な歴史上の人物の何人かはためらいもせずに、この問いに明確かつ全面的に「ノー」と答えた。ジャンドメニコ・ロマニョージの例はだれもが納得するのに十分なものである。かれは、どのような進歩的な政治活動を行うにせよ、文盲で経済的依存状態にある人々の支持を求めるのは避けねばならないと断言した。というのも、「かれらは自らの環境のせいで、よくても最も賢明な人々の意見に付き従うくらいのことしかできないから」であった[18]。当時の人が期待できたのは、かれらが反動や反民族主義の思想家の影響から逃れることくらいだった。しかし、なおさらよいのはかれらが政治にまったく関心を持たないことだった。

ヴィンチェンツォ・ジョベルティは統一以前の自由穏健派の第一線にいた巨人たちのうちの一人であるが、そのかれが自分の立場として信じていたのは次のことであった。すなわち、新聞や政治宣伝文のような「低俗な」媒体を通じてより多くの読者を獲得しようなどとはすべきではないということである。か

れによれば、民族的で自由主義的な意見が徐々に増えるには「思想上の貴族によって書かれた本」に頼る必要があった[19]。むろん、それは文盲の大衆の手の届く範囲にはない本である。実のところ、かれもロマニョージと同様に、もっぱらエリートが主導する民族共同体を望み、その中で大衆はせいぜい観客の役割を果たすことを想定していた。

私たちが注目した二つの立場はある共通の感情を示しているように思われる。この感情によって当時もっとも進歩的な自由派（民主派）の領域と穏健自由派の領域の双方は結ばれていた。いずれの領域のエリートたちも国民国家を想像したときには、自分たちが二つの異なる必要性の間で引き裂かれていると感じていた。一方で、かれらは、新しい建物の建設計画が包摂方針による共同の成果でなければならないと認めねばならなかった。というのも、これはどういうわけか一般的にはその時代の精神であり、個別的には民族的な語りの精神だったからである。ただもう一方では、これが物理的に不可能なだけでなく、最終的には望ましくもないと認めねばならなかった[20]。

この結節点の分析を、三人目の著者ルイジ・トレッリとともに終わらせよう。たしかにかれは 1848 年末に書いたものの中で、フランス革命後の近代政治がもはや支配者だけの仕事ではありえず、大衆の仕事でなければならないとの意見を共有しているように見えた。しかし同時に、イタリアではそれが可能とは思えないとも指摘していた。なにしろ、国家統一運動への参加に積極的な関心を示すイタリア人は 100 人中 5 人以下だったからである[21]。

またしても少数派である。統一過程のイタリアは、19 世紀における「出版資本主義」の発展[22]という点でも政治教育の発展という点でも周辺にあったようである。強調されるべきは、こうした限界にもかかわらず、まさにこの時期に民族が政治的関心を喚起し強い影響力を振るうべしとの主題が重く広く存在していた事実である。ただ実際にこの主題を語ることが許されたのは政治の駆け引きへ参加できた少数の人々だけである。それでもとくに 1848 年以降、そ

の駆け引きとは、まずもって民族を論じ民族のために行動することを意味した。政治について考えることは民族について考えることを意味する。まさに民族こそが政治の中心課題なのである。

同時に、ヨーロッパの他のあらゆる地域ではイデオロギー上の主題はなによりも人口の増えている階層への政治手法となる。これが意味するのは、基本的な争点が社会・政治制度に関する相違した考え方にあったということである。制度は一つの手法に基づいて議論され、それは場合によっては自由主義にも民主主義にも保守主義にも反動主義にも社会主義にもなりえた。ひるがえって、イタリアにおいて本当の意味で争点となっていたのは追加的な何かであった。すなわち、いかなる政治的な選択肢を展開するにせよ、そのための領土的前提という単純な存在である。

領土を拡張しようとする者もそれを阻止しようとする者も自らの政治的選択を表明すれば、当然の前提として、その数十年の間に民族という対象についての一つの立場をとることになる。人は自治という理由で民族に反対することも、革命の影響に強い精神的刻印を受けて民族を非難することもできるし、連邦制あるいは集権制といった形式のもとで民族を求めることも、ひいては共和派、君主論者、自由派、民主派、あるいは社会主義者としてさえ民族を望むことができる。しかしいずれにせよ、政治について論じる者たちは決断し自らの意見の周りに支持者や信奉者や活動家たちを集めるが、そのさいどうしても立場を明らかにしなければならない。すなわち、ある一定の領土的枠組みが実現できるかどうかについての立場、民族についての立場である。この意味で19世紀のイタリアの政治は、なによりもまず民族の政治なのである。

さらに、当然のことながらイタリアにおける国民国家の形成は同時に広くトランスナショナルな性格を有する現象であった。そして、イタリアの統一はむろん単独でではないにせよ、ヨーロッパ全体の中で政治の意味を変容させる過程に寄与した。このテーマこそさまざまな視点から論ぜられるものである。

まず、ヨーロッパのある特定の地域で実際に統一国家が形成されると、保守的な大国はその覇権に回収困難な打撃を受けた。というのも、ウィーン会議によって確立された勢力均衡が可能であったのはヨーロッパが分裂していたからである。統一イタリアは教会国家とナポリのブルボン家に反発して達成されたのはもちろんのこと、なによりも大国フランツ・ヨーゼフのオーストリアに反抗して成立した。そしてこの国はプロイセンやロシアをも含む反動勢力の同盟の要であった。

ただなによりも、イタリアが作られたのが王朝間の正統主義的連帯の絆が壊れた後、すなわち 1815 年の神聖同盟の前提が壊れた後であったというだけではない。そればかりか、イタリア統一は前例のないトランスナショナルな集合的主体の圧力の下で成ったのである。その主体がはっきりとした形を整えることが 19 世紀の新しい政治の本質的特徴の一つであった。その主体とはすなわち、世論である。

ヨーロッパにおける少なくともいくつかの支配王朝は自らの外交および軍事に関する政見を明確に述べるにあたり、事実上自国民の機嫌も考慮することになる。このような機運は 1860 年以前に自由主義文明がある程度しっかりと根付いたすべての国々で感じられていた。そしてそれゆえに、イギリスでは伝統的にイタリアの自由と独立に共鳴する者たちがその大義の下に多く集ったし、また、フランスではカトリックの政治的・文化的環境が強固で、これはイタリア統一に敵対的であったにもかかわらず、多くの支持者たちがリソルジメント運動にとって頼れる存在として現れていた[23]。

この点でイタリアにおける国民国家の形成は最も重要な出来事の一つであった。というのも、自由主義は 19 世紀半ばにヨーロッパで起こり展開したすえに、グローバルな過程にあったからである。一方で、イタリア統一を可能にしたのは、まずヨーロッパの進歩的な戦線から提供された暖かい支援の波であった。この戦線によって各地の政府は影響を受け、半島のパトリオットたちは確

かな財政的援助を獲得することができた。他方で、イタリア統一の実現によって、自由主義化しつつあったヨーロッパ地域の境界線はその外へとさらに押し広げられた。

要するに、循環的な過程であった。リソルジメントは脆くその包摂の具合にも限界があったが、それでも進歩的潮流がヨーロッパ規模で国際化していく方向のうちの一つであった。加えて、近代の自由が成功をおさめるための一つの型にして、自由が発現する具体的な形式でもあった。そしてその形式とは思想、出版、表現、結社の自由、そして、もちろん政治的自由である[24]。自由とともにあって伝統的な要因が引き受けた役割（例えば、サヴォイア家の利益。その背後にはいまだに伝統的な権威主義政治のかなりの残滓があったのだが）は認識しておかねばならない。しかし、だからといってそうした利益の隣に新しい利益があったことも忘れてはならない。当時の人々が目撃したのは、国境を越えた規模で自由な市民権の領域が拡大し、その可能性への確信が深められていく様相だった。

先に述べたように、志願兵のような現象は一義的なものではなかった。というのも、国際的な規模でさえ、自由主義的な使命を持つ多数派と並び、正統主義的で反動的な性格を持つ志願兵も少数ながらいたからである。しかし、いずれもが方法はさまざまであるにしても同じ参加論理の結果であった。つまり、それは純粋で単純な権力政治の原則に触発された古い王朝論理のかなたで、それでも生じた一つの政治化過程の結果であった。

さらに、どのような立場をとるにせよ、大義のための志願は国境を越えた形でおこなわれ、市民社会はその動員力をいっそう加速させたかに見えた。自由と絶対主義という相反する大義のいずれにもなりえたが、それでも、まずは自己を擁護するために戦う傾向にあった。そして、ほんの少し以前まで権力（アルカナ・インペリ）の神秘と考えられていたものを完全に手中にすることを目指していた。

しかし、イタリア統一過程は別の理由からもトランスナショナルであった。

実際に統一によって半島のさまざまな地域の人々が互いを知るようになっただけでなく、このように新たに知識が増大した結果、国家のさまざまな地理的領域の間に上下関係が立ち現れた。むろん、この上下関係はそれ自体、統一過程を特徴づけていた内的力学から予測できた結果であった。ただ同時にそれは、当時世界規模で生じていたより大きな上下関係が国家規模に反映されたものでもあった[25]。

北部は南部を征服したのか。いくつかの点ではそのとおりである。第一に軍事的な意味で統一過程の最終局面がそうであった。そして、第二に政治的な意味でもそうで、南部のエリートは統一後、国家における政治・行政上の地位の分配にさいして全体として相当に酷い扱いを受けたからである。しかし、この問題には強調しなければならない別の側面がある。つまり、この征服によって南部に自由主義的な諸制度が拡張されたという点である。これらの制度のおかげで、ブリガンタッジョの厳しい時期がおよそ10年後に終わると、かつてブルボン家のような絶対主義権力によって抑圧されていた市民は実際に声をあげることができるようになったのである。

国家統一によって理論の上では政治的にイタリアは自由で進歩的なヨーロッパの不可欠な一部となった。ただし、まさにその（西）ヨーロッパこそが世界の南側との対比を通じて自己像と自己認識を先鋭化させていたのである。世界は支配的な西側列強にますます深く服従したせいで、対比的なものとしてまとめ上げられていった。

この点について、いまや次のことが指摘されねばならない。すなわち、南部は1860年に半島の他の地域へと政治統合されたわけだが、民族の語りの支持者たちにとって、この地域に関する人類学的、社会・経済的な情報の多くが強調しているように思えたのは、南部が近代文明の前進している地域ではなく過去の野蛮な土地に属しているということだった。反対に北イタリアは、その当時周辺的な位置にいたにもかかわらず、文明世界の一部、世界の北側にいるこ

とが望めそうに見えた。その同じ北イタリアは、政治的にも軍事的にも国民国家建設に徹底して取り組み、国民を統治する準備のある政治指導者たちの大半を輩出した。「オリエンタリズム」言説の支持者はイタリアにもおり[26]、かれらの観点からすると南部イタリアは次のように描かれるようになった。すなわち、そこは少なくとも一時的には世界の南側に属していたが、時間をかけて贖うことのできる土地であり、そしてその贖いは北部の政治・経済的エリートたちの指導のもとで「文明化するという使命」を通じてのみ可能である、と[27]。

新しい王国とその指導者たちを待ち受けていた問題はオリエンタリズムに沿って解釈されたが、統一後の数年間に勃発したブリガンタッジョのせいで、この解釈には悲劇的確証が与えられてしまったようであった。したがって、南部の国家への統合過程は多くの人々によって、文明と野蛮の衝突という言葉で表現され始めた。例えば、キプリングは進歩という宗教の名の下で西洋列強は地球規模での植民地化を進め、その「重荷」に白人は耐えるよう運命づけられているとしたが、そうした「重荷」が地中海において現れたものが南部イタリアであった。

その結果、イタリアの国民国家は突如二つの部分に分裂させられた。しかもそれが起こったのは、政治的・制度的な単一主体としての輪郭を整え、国際的な規模でその地位が認められるよう努力しているまさにそのときであった。イタリアの支配者たちが気付いたのは次のようなことだった。南部が特権階級のテーブルの席につこうと本当に望むなら、北部は植民地という屈辱を受けている地球上のあの部分とどうしても運命を共にせざるをえなくなるだろうということ。つまり、南部は北部に発見されるやいなや、ただちに格下げされたのである。実際、このとき起こったのは境界線の向こう側へと南部を象徴的に追放することだった。そしてこの境界線においては、野蛮という根本的な「他者性」が想像され始めていた。この点で統一イタリアは救いようのないほどの二面性をもって生まれた。なにしろ、イタリアは内部に領土的な二元性を抱えており、

そして、これは当時の西欧諸国のいずれの国もこれほど尖鋭かつ壊滅的な形で経験してはいなかったものであったのだから。

出発点、つまり脆弱性というテーマに立ち返ってみよう。これだけがイタリアの特徴であったわけではないが、それでもこの脆弱性のせいで明らかに国民国家形成過程が堅実に進まなくなってしまった。しかも、このような不安定な過程は統一が実現した時点だけでなくそれ以後の諸局面でもそうあり続けた。結果、国民国家の価値が引き下げられるようになり、さらに、この価値引き下げ傾向は歴史叙述において再構成され、繰り返し語られた。統一イタリアが作られるなかで、当然ながら多くの異なる主体がさまざまな理由から排除され続けたか、あるいは形を整えつつあった機関内へと不適切な方法で統合されたままとなった。それらの主体は政治、社会、領土の面で、あるいはまた、文化、信条の面で締め出されていた。しかし修辞は別にして、留意すべきは次のことである。歴史は、死者や負傷者や不満分子や失望した人々の長い列の痕跡をとどめないような、そんな完全な国民形成過程を一般的に考察するのではないということ、これである。革命同様、国民形成もまた華やかな晩餐会ではないのである。

まとめておこう。悲劇は数多くあったが、いずれもが同じ性質とはかぎらなかった。悲劇とともに期待の地平が開かれ、進歩と自由のための奮闘に見合う憲法的枠組みがもたらされた。そしてこの奮闘は 19 世紀の解放過程に典型的なものであった。にもかかわらず次のような二つの事実があった。そのうちの一つは、イタリアが国民国家として統一される以前の言説においては包摂が強調されていたという事実である。ロマン主義的な情熱に基づき、半島のあらゆる住民を友愛の抱擁の中へと引きつけ、かれらを王朝の臣民から国民国家の構成員へと完全に変容させることが求められた。他方、イタリア国民を実際に形成する段となったとき、そこで依拠された政治モデルは平凡で視野が狭かったという事実もあった。これら、ロマン主義的な情熱と政治モデルという二つの

事実の間には裂け目があり、それは実に深かった。

当然ながら、イタリアの自由主義だけでなく全ヨーロッパの自由主義が、当時、社会的にはエリート主義的で政治的には差別的であった。ただそれでもやはり、選挙権を享受することを許されたイタリア国民の割合はわずか 2％であり、同国は当時のヨーロッパの自由主義諸国の中でその割合が最低とはいわないまでも最も低い国々のうちの一つであった[28]。悲劇的なことに、そのせいであの修辞に溢れた支配的な語りの限界が著しく強調されたのである。ここで限界が指摘された語りこそ、何十年にもわたって提示され続けてきた語り、すなわち、民族的なリソルジメントとは結束したイタリア人集団が共通の主権を獲得し、同時に、外国人による抑圧から祖国を救済することであるとの、あの語りにほかならない。

注

(1) Walter Maturi, *Interpretazioni del Risorgimento*, (Torino: Einaudi, 1962).

(2) Mario Isnenghi, Eva Cecchinato, "La nazione volontaria", in *Storia d'Italia, Annali, 22, Il Risorgimento*, eds. Alberto Mario Banti, Paul Ginsborg (Torino: Einaudi, 2007), 717.

(3) Marco Meriggi,"Locale versus nazionale. L'Italia degli storici negli ultimi cinquant'anni", in *Nationalgeschichte als Artefakt. Zum Paradigma "Nationalstaat" in den Historiographien Deutschlands, Italiens and Österreichs*, eds. Hans Peter Hye, Brigitte Mazohl, Jan Paul Niederkorn (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2009), 307-308.

(4) Alberto Mario Banti, *La nazione del Risorgimento. Parentela, santità e onore alle origini dell'Italia unita* (Torino: Einaudi, 2000).

(5) ［訳註］祖国愛の原語は patriotism である。

(6) このテーマについては、Alberto Mario Banti, *L'onore della nazione, Identità sessuali e violenza nel nazionalismo europeo* (Torino: Einaudi, 2005) を参照。

(7) Alberto Mario Banti, Paul Ginsborg, *Per una nuova storia del Risorgimento*, in Banti, Ginsborg, *Storia d'Italia*, XXIII-XXIV.

(8) Maria Pia Casalena, *Antirisorgimento. Appropriazioni, critiche, delegittimazioni* (Bologna: Pendragon, 2013).

(9) Lucy Riall, *Garibaldi.L'invenzione di un eroe* (Roma-Bari: Laterza, 2007), 346.

(10) ブリガンタッジョとその参加者数については、以下のように評価が分かれる。Franco Molfese, *Storia del brigantaggio dopo l'Unità* (Milano: Feltrinelli, 1964), Roberto Martucci, *L'invenzione dell'Italia unita, 1855-1864* (Firenze: Sansoni, 1999), Salvatore Lupo, *L'Unificazione italiana. Mezzogiorno, rivoluzione, guerra civile* (Roma: Donzelli, 2011), Carmine Pinto, "Conflitto civile e guerra nel Mezzogiorno", *Meridiana*, 69 (2011), 1-30. さらに以下も参照のこと。Carmine Pinto, *La guerra per il Mezzogiorno. Italiani, borbonici e briganti 1860-1870* (Roma-Bari: Laterza, 2019).

(11) Albert Soboul, *Dictionnaire historique de la révolution française* (Paris: PUF, 1989), 607, 1076.

(12) *Diccionario de historia de España*, ed.Germán Bleiberg (Madrid: Allianza Editorial, 1979), 685-688.

(13) Riall, *Garibaldi*, 398.

(14) Alexis de Tocqueville, *La democrazia in America (1835-1840)* (Milano: Rizzoli, 1999).

(15) Raimondo Luraghi, *Storia della guerra civile americana* (Milano: Rizzoli, 1985), 236-237.

(16) Riall, *Garibaldi*, 145-146, 159-167.

(17) Alberto Mario Banti, *Sublime madre nostra. La nazione italiana dal Risorgimento al fascismo* (Roma-Bari: Laterza, 2011), 7.

(18) Marco Meriggi, "Opinione pubblica" in *Atlante culturale del Risorgimento. Lessico del linguaggio politico italiano dal Settecento all'Unità*, eds. Alberto Mario Banti, Antonio Chiavistelli, Luca Mannori, Marco Meriggi (Roma-Bari: Laterza, 2011), 158 における引用文を参照。

(19) *Ibid*, 159.

(20) この方向性については、Simon Levis Sullam, *L'apostolo a brandelli. L'eredità di Mazzini tra Risorgimento e fascismo* (Roma-Bari: Laterza, 2010), 17 によって提案されたマッツィーニに関する最新の再解釈も参照のこと。この中で著者はとくに「かれの思想の父権的・権威主義的特徴」を強調している。

(21) Meriggi, "Opinione", 19-21.

(22) この定義については、Benedict Anderson, *Imagined communities: Reflections on*

*origin and spread of Nationalism* (London-New York: Verso, 1991) を参照のこと。

(23) Riall, *Garibaldi*, Maurizio Isabella, *Risorgimento in Exile. Italian Émigrés and the Liberal International in the Post-Napoleonic Era* (Oxford: Oxford University Press, 2009), Elena Bacchin, *Italofilia. Opinione pubblica inglese e Risorgimento italiano 1847-1864* (Torino: Carocci, 2014).

(24) このテーマについては、*Giuseppe Mazzini and the Globalization of Democratic Nationalism 1830-1920*, eds. Christopher Alan Bayly, Eugenio Federico Biagini (Oxford: Oxford University Press, 2008).

(25) ［訳註］この上下関係は後に見るように文明と野蛮の二項対立的な認識と対になっていく。

(26) Filipa Lowndes Vicente, *Altri orientalismi. L'India a Firenze 1860-1900*, (Firenze: Firenze University Press, 2012).

(27) このテーマについては、John Dickie, *Darkest Italy. The Nation and stereotypes of the Mezzogiorno, 1860-1900* (Basingstoke-London: MacMillan, 1999), Nelson Moe, *Un paradiso abitato da diavoli. Identità nazionale e immagini del Mezzogiorno* (Napoli: L'ancora del Mediterraneo, 2004), Marta Petrusewicz, *Come il Meridione divenne una questione* (Soveria Mannelli: Rubbettino, 1998), Paolo Macry, *Unità a mezzogiorno. Come l'Italia ha messo insieme i pezzi* (Bologna: Il Mulino, 2012); *"L'Italia è". Mezzogiorno, Risorgimento e post-Risorgimento)*, ed. Maria Marcella Rizzo (Roma: Viella, 2013), *La costruzione dello Stato-Nazione in Italia*, ed. Adriano Roccucci (Roma: Viella, 2012).

(28) Marco Meriggi, *L'Europa dall'Otto al Novecento* (Roma: Carocci, 2006), chapter 1.

## 参考文献

Anderson, Benedict. *Imagined communities: reflections on the origin and spread of Nationalism*. London-New York: Verso, 1991.

Bacchin, Elena. *Italofilia. Opinione pubblica inglese e Risorgimento italiano 1847-1864*.Torino: Carocci, 2014.

Banti, Alberto Mario. *La nazione del Risorgimento. Parentela, santità e onore alle origini dell'Italia unita.* Torino: Einaudi, 2000.

Banti, Alberto Mario. *L'onore della nazione. Identità sessuali e violenza nel nazionalismo europeo.* Torino: Einaudi, 2005.

Banti, Alberto Mario, and Ginsborg, Paul. "Per una nuova storia del Risorgimento", in

*Storia d'Italia, Annali, 22, Il Risorgimento*, edited by Alberto Mario Banti, Paul Ginsborg. Torino: Einaudi, 2007, XXIII-XLI.

Banti, Alberto Mario. *Sublime madre nostra. La nazione italiana dal Risorgimento al fascismo*. Roma-Bari: Laterza, 2011.

Bayly, Christopher Alan, Biagini, Eugenio Federico eds. *Giuseppe Mazzini and the Globalization of Democratic Nationalism 1830-1920*. Oxford: Oxford University Press, 2008.

Bleiberg, Germán, ed. *Diccionario de historia de España*. Madrid: Allianza Editorial, 1979.

Casalena, Maria Pia. *Antirisorgimento. Appropriazioni, critiche, delegittimazioni*. Bologna: Pendragon, 2013.

Dickie, John. *Darkest Italy. The Nation and stereotypes of the Mezzogiorno, 1860-1900*. Basingstoke-London: MacMillan, 1999.

Isabella, Maurizio. *Risorgimento in Exile. Italian Émigrés and the Liberal International in the Post-Napoleonic Era*. Oxford: Oxford University Press, 2009.

Isnenghi, Mario, Cecchinato, Eva. "La nazione volontaria", in *Storia d'Italia, Annali, 22, Il Risorgimento*, eds. Alberto Mario Banti, Paul Ginsborg. Torino: Einaudi, 2007, 697-720.

Levis Sullam, Simon. *L'apostolo a brandelli. L'eredità di Mazzini tra Risorgimento e fascismo*. Roma-Bari: Laterza, 2010.

Lowndes Vicente, Filipa. *Altri orientalismi: l'India a Firenze, 1860-1900*. Firenze: Firenze University Press, 2012.

Lupo, Salvatore. *L'Unificazione italiana. Mezzogiorno, rivoluzione, guerra civile*. Roma: Donzelli, 2011.

Luraghi, Raimondo. *Storia della guerra civile americana*. Milano: Rizzoli, 1985.

Macry, Paolo. *Unità a mezzogiorno. Come l'Italia ha messo insieme i pezzi*. Bologna: Il Mulino, 2012.

Martucci, Roberto. *L'invenzione dell'Italia unita, 1855-1864*. Firenze: Sansoni, 1999.

Maturi, Walter. *Interpretazioni del Risorgimento*. Torino: Einaudi, 1962.

Meriggi, Marco. *L'Europa dall'Otto al Novecento*. Roma: Carocci, 2006.

Meriggi, Marco. "Locale versus nazionale. L'Italia degli storici negli ultimi cinquant'anni", in *Nationalgeschichte als Artefakt. Zum Paradigma "Nationalstaat" in den Historiographien Deutschlands, Italiens und Österreichs*, eds. Hans Peter Hye,

Brigitte Mazohl, Jan Paul Niederkorn. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2009, 307-318.

Meriggi, Marco. “Opinione pubblica” in *Atlante culturale del Risorgimento. Lessico del linguaggio politico italiano dal Settecento all’Unità*, eds. Alberto Mario Banti, Antonio Chiavistelli, Luca Mannori, Marco Meriggi. Roma-Bari: Laterza, 2011, 149-162.

Moe, Nelson. *Un paradiso abitato da diavoli. Identità nazionale e immagini del Mezzogiorno*. Napoli: L’ancora del Mediterraneo, 2004.

Molfese, Franco. *Storia del brigantaggio dopo l’Unità*. Milano: Feltrinelli, 1964.

Petrusewicz, Marta. *Come il Meridione divenne una questione*. Soveria Mannelli: Rubbettino, 1998.

Pinto, Carmine. “Conflitto civile e guerra nazionale nel Mezzogiorno”. *Meridiana* 69 (2011): 1-30.

Pinto, Carmine. *La guerra per il Mezzogiorno. Italiani, borbonici e briganti 1860-1870*. Roma-Bari: Laterza, 2019.

Riall, Lucy. *Garibaldi. L’invenzione di un eroe*. Roma-Bari: Laterza, 2007.

Rizzo, Maria Marcella, ed. *“L’Italia è”. Mezzogiorno, Risorgimento e post-Risorgimento*. Roma: Viella, 2013.

Roccucci, Adriano, ed. *La costruzione dello Stato-nazione in Italia*. Roma: Viella, 2012.

Soboul, Albert, ed. *Dictionnaire historique de la révolution française*. Paris: PUF, 1989.

Tocqueville, Alexis de. *La democrazia in America (1835-1840)*. Milano: Rizzoli, 1999.